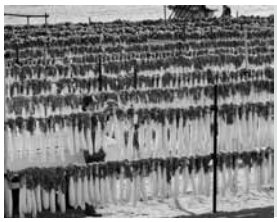
2015 1/13
No.1986
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

三浦海岸（三浦市）の浜辺で、穏やかな日差しを浴びながらダイコンがずらりと干されている。地元の農家有志によって約20年前から行われ、冬の風物詩として定着した。天日干しの作業は２月中旬まで続く。

神奈川新聞社



政経かながわ

2015 1/13 No.1986

contents

視点・点描 3
時間軸を楽しむ発想から

経　済 4
真価問われるアベノミクス
鍵握る消費の行方

政治反射鏡 7
「安倍１強」屹立の影で…
国民の不安にどう応えるか

経　済 8
欠陥エアバッグに世論反発
タカタ、創業家のトップ雲隠れ

くらし2015 10
電子たばこ、是か非か

広告珍談 12
うまい物もろもろ⑤
カメはおめでたい！

ＮＮＡアジア経済リポート 13

会員のページ 14
設立50周年は来年４月に（その７）講演会④
会員の動き

会員のページ 15
設立50周年は来年４月に（その７）講演会④
会員の動き

事務局だより

◇横浜定例講演会
2015年１月26日（月）
14時～15時30分
横浜情報文化センター　６階
「情文ホール」
講師は元ＮＨＫアナウンサー、
フリーアナウンサーの
国井　雅比古氏
演題は「小さな旅して～人との出会いと発見」

◇横浜定例講演会
2015年２月９日（月）
13時30分～15時
新横浜プリンスホテル　３階
「セレナーデ」
講師はダイヤ精機株式会社
代表取締役の　諏訪　貴子氏
演題は「中小企業の経営改革と人材確保・育成」

視点点描

時間軸を楽しむ発想から

西洋と日本の文化を比較する際、しばしば用いられるのが庭園の造形だ。

自然をあえて否定するように変形させ、幾何学的な構造に取り込んだ欧州の庭園。これとは対照的に樹木や池、こけむした石を巧みに調和させ、閉ざされた空間に自然を再現したのが日本庭園だ。一見、人工的な美を拒絶するようだが、自然の要素を集約していかにも「自然らしく」しつらえた日本庭園は、やはり独自の意匠といえるのだろう。

文明批評でも名高い評論家の加藤周一が「文学とは何か」のなかで庭について語っている文章がある。とりわけ引かれるのは日本庭園の重要な要素として「時間」を挙げている点だ。

「朝に夕に、雨に風に、時間とともに変化する、印象派の画家たちが描いたよりもはるかに複雑微妙な効果をあらわす自然の光―」

確かに鎌倉の寺社を訪ねる楽しさは、時間軸に沿って変わる自然の表情にもある。花々に映る朝露の輝きから、竹林の間から差す日中の光、さらに寺院の屋根に闇が落ちてゆく夕刻の景…と、時が移るにつれ、その趣はまるで異なって見える。

幼いころから親しんだ鎌倉だが、時間軸での楽しみ方とは、指摘されてあらためて納得できる。インターネットで誰もが人類の英知にたやすくアクセスできる時代となったが、多くの情報に囲まれても、そのとらえ方や見方が偏向しては何にもならない。当たり前に言われていることだが、こんなところで思い知らされる。

昨年末、文学者たちの集まる会合で、文芸批評を目にする機会が少ない現状を嘆く声が聞かれた。批評とは、単に文学の良しあしや面白さを語る書評などとは異なると、彼らは訴える。文明や風俗を絡めて世の中をひもとく、それ自体が文学である、と。ところが難解なイメージからか、多くの読者を獲得できず以前ほど注視されなくなって久しい。

確かにすぐれた批評を活字で追う作業は、ものの見方や考え方を血肉にしてくれる。政治や経済を語るテレビのコメンテーターとはまた違った視点を与えてくれるものだ。小林秀雄や江藤淳の文章は、それ自体、新しい世界へ導いてくれる刺激的な文学だった。

さまざまな立場や意見が行き交う多声の時代、あらためて批評を見直す時ではないかと、年の初めに思う。

（神奈川新聞社文化部　丸山　孝）

広告珍談　うまい物もろもろ⑤

宮野　力哉

カメはおめでたい！

あけましておめでとうございます。ことしもご高覧のほどを。

おめでたいところで、ツルは千年、カメは万年と申しまする。はてさて、そんなおめでたいカメとそっくりなお品ものをご披露、申上げませう。

亀の子たわしである。食べ物シリーズの連載に、たわしとはどうしてとお思いだろうが、毎日毎食後、お世話になっていることはだれもが知っている。なによりも「亀の子束子（たわし）」というおめでたい品名、すばらしいではないか。

では、広告の中身から。左半分に『問題』『判じ絵』とあるのは、絵ときクイズである。解答しましょう。

「しし」は二つのし→二し→「西」。斧のイラスト→「尾の」。「亀」のイラストにつづいて「の」。子どものイラスト→「こ」、田んぼのイラスト→「た」、輪が４つ→「わし」。

並べると、「西」「尾の」「亀」「の」「こ」「た」「わし」。すなわち「西尾の亀のこたわし」と読めた。

どちらの家庭でも、3度3度、お皿をごしごしこすってるはたらき者の亀の子。カメはまことに愛らしい。何にもしゃべらないで、懸命に活きていく。万年もですぞ。

先年、小笠原へ行った。浜辺でウミガメが産卵するという。ヨチヨチ浜を上がってきた彼女は、うしろ足で浜に穴をほった。一息すると（そう見えた）、ころころっとまんまるの白いタマゴが……よほど苦しいのだろう、彼女のつぶらな眼からナミダが。産卵が終わって彼女は、うしろ足で砂をかけて穴を埋めもどした。そして海へ向かって、戻っていった。浜辺には、足あとお腹を引いていった跡が残っていた。彼女は一度もふりかえらなかった。ニンゲンの眼には、それぞれ光るものがあった。

たわしは束子と書く。ワラを束ねて、巻きとめたもの。タテ長が多い。そこへこんもりとした、亀の子が出現した。１９０８（明治41）年のこと。ワラよりも堅い、シュロやヤシの実の繊維をつかって西尾正左衛門が生み出した。それから10年後、この広告がでた。現在はこの世に生まれて１１２年、万年から引くとどうなるの？

《亀甲文（きっこうもん）》という図柄がある。亀の甲羅（こうら）をかたどった、六角形の連続模様。瑞祥（ずいしょう）のカメ、おめでたい模様として、古くからきものや調度品のデザインに用いられた。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）亀の子たわしの広告・１９１８（大正７）年９月11日・朝日新聞掲載